様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　5 月　1 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：19520288
研究課題名（和文）　グローバル化によるディアスポラ文学の変容
　　－ディアスポラ・アイデンティティの再編－
研究課題名（英文）　Change in the diaspora-literature caused by globalization
　　—Reorganization of the diaspora-identities

研究代表者
鈴木　道男（SUZUKI MICHIO）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：20187769

研究成果の概要：
ディアスポラのアイデンティティは常識的には堅固なものだと考えられているが、決して不変のものではなく、時代状況の変遷とともに変わっていく。その変化を主導する重要な要素は文学であるとの仮定の下、トランシルヴァニアのドイツ人、ブコヴィナのユダヤ人、チェコおよびシンガポールのタミル人マイノリティなどの文学を材料に、グローバル化のなかでマイノリティが自らのディアスポラ・アイデンティティをいかに捉え直そうとしているのか、またその再編の中で彼らの文学がいかなる変容を遂げつつあるのかを分析し、そこに描出されたマイノリティ意識、すなわちアイデンティティの変遷を検証した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,800,000	540,000	2,340,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・各国文学、文学論
キーワード：その他の各国文学

１．研究開始当初の背景

国や民族の「境界」を超えていくグローバル化の波のなかで、「祖国」と定住先との物理的な距離は克服可能なものとなり，マイノリティにとって「ディアスポラ」は，強いられた状況というよりは，個々人が自ら選び取った状況へとその意味を変えつつある。彼らのディアスポラ・アイデンティティは再編を迫られているのである。同時に、これらマイノリティの文学は，グローバル化のなかでより強力に「祖国」に向けて発信可能になり，多元的な文化のあり方への関心が強まっていることも与って，「祖国」の側が「ディアスポラ」に注ぐ眼差しをも変えはじめている。

近代の文学研究は，国家の「正史」とその共有による紐帯の形成というナショナリズムの成立過程に並行して発展してきた。そのため，文学の規範もまた，その成立過程において，領土化された政治的単位を暗黙のうちに想定していた。その意味でディアスポラ文学は，従来は，ある言語文化圏で最も周縁的位置にある集団の文学営為を意味しており，

当該言語文化圏の主要地域における受容も非常に遅れている。しかし，本研究はこの文学を，近年，文化研究や歴史学，社会学，文化人類学，政治学等の視点から学際的に展開されているディアスポラ研究の成果を踏まえ，その多元文化性という積極的視点から捉えようとした。

２．研究の目的

本研究は、グローバル化のなかでマイノリティが自らのディアスポラ・アイデンティティをいかに捉え直そうとしているのか、またその再編の中で彼らの文学がいかなる変容を遂げつつあるのかを解明し、文学という営みが、ディアスポラ・アイデンティティの再編にいかなる役割を果たしているかを明らかにしようとするものである。また、グローバル化のなか、ディアスポラ文学がより強いメッセージを発信可能になったことで、「祖国」にいかなる眼差しの変化をもたらし、「祖国」との文化的影響関係を変えつつあるかをも明らかにする。

また，「祖国」におけるディアスポラ文学の受容状況を分析し，グローバル化が「祖国」におけるディアスポラの理解をどのように変化させ，それはいかなる政治的社会的意味を持つのかを捉える。

そのうえで，各事例研究で得られた成果を比較・検討し，グローバル化がマイノリティのディアスポラ・アイデンティティをどのように変え，またそれが文学を通して，「祖国」との関係をどのように変容させているのか，その政治的社会的意味を事例に即して検討する。

後述のように我々はこのテーマに対して、安易な結論的文句で総括することをあえてしていない。同じ視点から様々なディアスポラを観察し,その様相を総合すると、その相違のはなはだしさに驚かされたためである。

３．研究の方法

研究体制

本研究では、ディアスポラ文学に対するグローバル化の影響を多面的に把握し，複数の事例を比較検討して理論化を試みるため，４名の研究者による共同研究とした。研究代表者および研究分担者はそれぞれ事例研究を行い，その結果について共同で討議した。研究計画実施の統括と議論のとりまとめは，研究代表者が担当した。分担テーマは以下の通りである。

(1)鈴木道男「開かれた鉄のカーテンとトランシルヴァニア・ザクセン人文学の変容」

チャウシェスク政権を倒したクリスマス革命の後、堰を切ったようにトランシルヴァニア・ザクセン人たちがドイツ本国へ「帰郷」し、ルーマニアのザクセン人にはほとんど高齢者しか残らないという状況に至った。ルーマニアに留まった人とドイツに暮らす人との間をさえぎるのはもはや移動可能な空間的距離しかないのだが、本国に「帰った」人は過去に味わったことのない疎外感に襲われ、逆にルーマニアへの「帰郷」を目指す動きも顕在化している。ドイツにあって疎外感の文学を生んでいるザクセン人たちは、本来同一であるはずの「ドイツ人」のなかで、きわめて特殊な形態のディアスポラになっているととらえることができるのである。中世に入植して以来のトランシルヴァニア・ザクセン人のアイデンティティの変遷に関する研究をふまえ、８００年以上もディアスポラであり続けた人々の「ディアスポラ性」が決して一様ではなかったことに着目し、彼らの「疎外の文学」を意味づけ、ディアスポラとアイデンティティの問題に関する研究に寄与する。

(2)山下博司「シンガポールにおけるディアスポラ文学の再編ータミル語文学を中心にー」

シンガポールでは，強い国家権力による文化政策が推進されるなか、華人、インド系住民、マレー系住民の文学が再定義され、国民統合の大義のもとに各民族集団の文学的伝統が再編されつつある。シンガポールにおけるディアスポラ文学再編の現状を，タミル語の文学や文筆活動を中心に考察した。

(3)藤田恭子「東欧革命後のブコヴィナ・ユダヤ系ドイツ語文学受容におけるブコヴィナ像の変容」

ブコヴィナは旧ハプスブルク帝国領で，第一次世界大戦後ルーマニア領となり，第二次世界大戦中のユダヤ人虐殺を経て，戦後，北部はソ連邦ウクライナ領に，南部はルーマニア領に分断された。この地域では，ルーマニア領となった後，数多くの優れたドイツ語詩人たちが輩出した。しかし彼らは第二次世界大戦後に，東西ヨーロッパ，アメリカ，イスラエル等世界各地へ離散したため，その認知が遅れた。ドイツ語圏で彼らの作品がブコヴィナの名を冠してはじめて紹介されたのは，1982 年である。だが，1989 年の東欧革命を機に，ブコヴィナは，ハプスブルク帝国の平和的多民族共生のシンボルとしてドイツ語圏のメディアに頻繁に登場し，彼らの詩作もまた多く読まれるようになる。ブコヴィナ出身のユダヤ系ドイツ語詩人たちがディアスポラのなかで描いた「故郷」と彼らを長らく周縁に押しとどめていた主要ドイツ語圏で東欧革命後に称揚されたブコヴィナ像との落差を探り出し，その政治的社会的意味を解明する。

(4)佐藤雪野「チェコにおけるマイノリティ文学の変容」
主たる事例として，チェコのユダヤ系ドイツ語作家レンカ・ライネロヴァー(1916-)を取り上げる。ライネロヴァーは両次大戦間期のプラハで成長し，第二次世界大戦中，ユダヤ人迫害を逃れてメキシコへと出国したが，戦後，社会主義国となったチェコスロヴァキアに帰還し，東欧革命を経て現在もドイツ語での著作活動を続ける「プラハ最後のドイツ語作家」である。彼女の人生と作品における生国の政治的変遷及び戦争の与えた影響を、現在に至るまで時系列的に考察することにより、ディアスポラ・アイデンティティの変遷を検討する。

４．研究成果

研究代表者および研究分担者はそれぞれ，ルーマニアからの「帰還」ドイツ人，シンガポールやクアラルンプルのインド系および華人系マイノリティ，ブコヴィナの離散ユダヤ人，チェコのユダヤ人の文学について，グローバル化のなかでマイノリティが自らのディアスポラ・アイデンティティをいかに捉え直そうとしているのか，またその再編の中で彼らの文学がいかなる変容を遂げつつあるのかを分析した。また，「祖国」におけるディアスポラ文学の受容状況を分析し，グローバル化が「祖国」におけるディアスポラの理解をどのように変化させ，それはいかなる政治的社会的意味を持つのかを考察した。

そのうえで，各事例研究で得られた成果を比較・検討し，グローバル化がマイノリティのディアスポラ・アイデンティティをどのように変え，またそれが文学を通して，「祖国」との関係をどのように変容させているのか，その政治的社会的意味はなにかを明らかにした。

研究代表者と研究分担者藤田恭子の事例に即してこれを分かりやすく示す。

中世に移民が開始して以来、トランシルヴァニアのドイツ人たちは、常に特権を付与され、ハンガリー人貴族とセーケイ人とともに三民族議会を構成し、自治を守り通してきた。しかし、民族主義の高まりによって、この地がハンガリー、その後ルーマニアという「民族国家」に帰属することになってはじめて、彼らの自治権は剥奪され、自らをマイノリティと位置づける必要に迫られた。彼らは自治の回復のため、戦間期にこぞってナチズムを信奉した。そして第二次大戦の結果、多くがトランシルヴァニアを追われ、ドイツ本国に「帰還」することになる。ルーマニアに残った人々の多くも、チャウシェスク体制の崩壊後，堰を切ったように帰還してきた。

戦前の「帰還者」はナチスの大義に従った。戦後すぐの恐ろしい迫害を経た帰還者たちの真情の中には、まだナチス時代のドイツとの共鳴観が失われていなかった。ナチズムに拠る限り、かれらはディアスポラではなく、「ドイツ世界の東の護り」でいることができたのである。50 年代においても、帰還ドイツ人たちの雑誌『南東ドイツ四季報』には、ナチズムの語彙があふれた詩が何のこだわりもなく掲載されているのを観察することができる。しかしナチスの時代に形成されたドイツとの一体感が、戦後は逆にドイツの人々との間に立ちはだかった。ナチス時代の言語の呪縛に、彼らは長く縛られ続けたからである。ドイツの人々と共に「総懺悔」をするのが後れたこと、これが彼ら以外と彼らとに大きな壁を作ることにもなっていた。

しかし、当初『南東ドイツ郷土通信』であった誌名から「郷土」がはずされ、掲載作品にも多様性が見られるようになり、戦争体験や阻害などをテーマにしたものが現れ、またパウル・ツェラーンの作品の掲載や、モーゼス・ローゼンクランツの発掘といった、ユダヤ系文学の紹介に対する貢献が行われるようになってくる

とはいえ、『南東ドイツ四季報』掲載の論文や文学作品に表明されているアイデンティティの意識には、急激な変化が見られない。これは編集委員会と、その背後にあり続けた南東ドイツ文化工房の合議あるいは抗争というクッションが編集に影響していることを覗わせる。とはいえ、クリスマス革命以後の掲載詩の多様化は著しい。そしてあらたな帰還者を特徴付けるのは、ルーマニアの地にもドイツにもアイデンティティを求めることができない二重のディアスポラ状態の苦悩である。文化工房が形を変えて主要メンバーが大学の付置機関となった 2001 年以降、ますます帰還者の生の声を表出した論文と作品が雑誌を彩るようになっていると思われる。そして現在、彼らの雑誌はミュンヒェン大学の付置研究機関の機関紙『反映』となり、広く読まれるものへと脱皮するに至った。作品を通じてこの「二重のディアスポラ状態の苦悩」を訴え続けたことが文化行政を動かしたということもできる。

グローバル化の中でトランシルヴァニアとドイツとはあらゆるメディアが瞬時に通じ、2 時間の飛行が隔てるに過ぎなくなっている。いちどドイツに帰還した人々が、トランシルヴァニアに「再帰還」する動きも見られる。彼らの作品もこの雑誌から読むことができる。現在の「帰還ドイツ人」はディアスポラの苦悩を引きずっているが、次の世代は果たして自らをディアスポラと規定するのか、その心情を捉えるために、この雑誌の消息を今後を注視する必要がある。すなわち、グローバル化は一つのディアスポラを過去のものにするかも知れないからであり、それ

を教えるのも文学であるからである。
　各研究分担者も、事例に応じて同様の分析をおこない、ディアスポラのアイデンティティの流動性と、それを文学が鏡のように反映し、かつその作品が共感を持って読まれることでマイノリティのアイデンティティが新たに醸成される状況を描出するに至っている。
　藤田は現在のウクライナとルーマニアにまたがる、ハプスブルクの東方経営の拠点であったブコヴィナでドイツ人と同等の権利を付与されて暮らしていたユダヤ人たちの文学における「ブコヴィナ像」に着目し、以下の結論を得ている。
第二次世界大戦後に、「第二のディアスポラ」の民となったブコヴィナのユダヤ系詩人たちが、故郷ブコヴィナを振り返り、ハプスブルク領時代の「平和的」で多様な民族や文化が「共存」していた時代を愛おしむような内容のテクストを生み出した背景には、ショーアーの罪過を経てもなお、その「過去の克服」が遅々として進まないドイツやオーストリアへの批判と憤りがあったことをも、見過ごしてはならない。この現実に対しツェランは、故郷の思いを深めつつも、詩作においてはむしろ孤独な道を選んだ。ドイツ語による従来の表現法を徹底的に解体し、ナチズムと通底すると思われる部分を一切排した新たなドイツ語表現を模索していった。他方、アウスレンダーやローゼンクランツ等は、ショーアーの過去を経てもなお、ドイツ語話者にして表現者である自らの存在を受け入れてくれようとせず、「よそ者」として扱う戦後のドイツやオーストリアの状況への絶望を背景に、自らのアイデンティティをハプスブルク領時代の故郷ブコヴィナに求め、詩作のなかで、寛容の精神に満ちた多文化性を謳った。それは彼らにとって、戦後のオーストリアやドイツに対する、一つの異議申し立てでもあったのである。
一方、東欧革命後のドイツやオーストリアでは、ナショナルな感情が高揚するものの、ナチズムの過去ゆえに、それを正面に掲げることはできないというジレンマに陥っていた。それゆえ、「多文化性」を前面に出しつつ、実際には「ドイツ文化」の優位を含意するブコヴィナ像は、「ヨーロッパ統合」の旗印のもとで、ドイツ文化ナショナリズムを顕彰するために、実に便利な素材となったのである。ブコヴィナのユダヤ系詩人たちがディアスポラのなかでアイデンティティを模索し、うち立てたブコヴィナ像は、東欧革命以後のドイツやオーストリアで、こうして「多文化共生」という砂糖をまぶされた、新たなドイツ文化ナショナリズムの言説へと「再編」された。こうして、「ドイツ」と「ユダヤ」の錯綜する関係は、さらに続いていく。ドイツやオーストリアにおける「過去の克服」は、ヨーロッパ統合のなかで新たな局面を見せつつ、まだ終わっていない。
　藤田がこのように示すように、本研究が扱う限りの内容においても、ディアスポラの問題は、ほぼ地域を同じくするトランシルヴァニアのドイツ人とはまったく異なった様相を呈している。問題の深さと、容易な結論付けを我々自らに対して制止する所以である。
　その他の分担者の成果については、次の主たる論文等を参照されたい。佐藤はレンカ・ラネルヴァーという作家個人におけるチェコ語とドイツ語の問題に焦点を当て、山下は東南アジアの様々なインド系マイノリティの宗教的作品に焦点を当てて同様の問題に光を当てている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①山下博司「アジア的宗教とエコフィロソフィーの可能性」『宗教研究』第 82 巻(第 4 輯 359 号)、413-414、2009、査読有
②山下博司、書評、関根康正著『宗教紛争と差別の人類学』世界思想社、2006 年、日本南アジア学会『南アジア研究』、第 20 号、267-274, 2008、267-274、査読有
③ 佐藤雪野"Česka, která cestovala do Japonska na začátku 20. století" *Cestování včera a dnes*, vol.5-1, pp.10-11, 2008, 査読有
④山下博司、ヒンドゥー司祭の世界進出と養成システムの変容、宗教研究、第 81 巻 4 号、21-142、2008、査読有
⑤坂本道子著・藤田恭子訳、文章作法入門 ―ドイツにおける『ロシア・ドイツ人』文学の困難な出発について― （原著ドイツ語）、東北ドイツ文学研究 50 号、2007、185-196、査読有

〔学会発表〕（計２件）
①佐藤雪野、「ロマと非ロマの共生―スロヴァキアとチェコの事例」、第２回ロマ（ジプシー）シンポジウム、2009 年３月 15 日、国立オリンピック記念青少年総合センター
②佐藤雪野、マイノリティの歴史とオーラル・ヒストリー及び回想録 ― チェコスロヴァキアのロマの事例 ―、日本西洋史学会第 58 回大会、2008 年 5 月 11 日、島根大学

〔図書〕（計３件）
①山下博司、『ヨーガの思想』（講談社選書メチエ 432）、全 246 頁、2009
②鈴木道男編グローバル化によるディアスポラ文学の変容―ディアスポラ・アイデン

ティティの再編―、(平成 19～20 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書)、2009、80 項
③佐藤雪野、『チェコとスロヴァキアを知るための 56 章』第 2 版(薩摩秀登編著)、明石書店、2009 年、134-139 頁、査読無

〔その他〕
鈴木はブコヴィナユダヤ及びドイツ人の詩を収集収録したアルフレート・キットナーのコレクション(いわゆる『キットナーコレクション』の翻刻(二次完成稿 2008)を行い、一部翻訳も試みているが、版権が多岐に渡っていると想定され、確認不能なので、全面的な公開を避けている。研究の目的に限って要望に応じて部分的に開示に応じる。

６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木　道男（SUZUKI MICHIO）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：20187769
(2)研究分担者
山下　博司（YAMASHITA HIROSHI）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：20230427
藤田　恭子（FUJITA KYOUKO）
東北大学・大学院国際文化研究科・准教授
研究者番号：80241561
佐藤　雪野（SATOU YUKINO）
東北大学・大学院国際文化研究科・准教授
研究者番号：40226014

(3)連携研究者
なし